

博士の愛した数式

小川洋子著 新潮社 2003

ネットワーク情報学部教授 巖 基珠

数学はとにかくいやという人が少なくないだろうが、早くこの小説に接することができたらそれが変わったかもしれない。この小説は、事故による脳損傷で80分しか記憶が維持できない、数学専門の元大学教員「博士」と、その家に働きに来る家政婦の「私」、そしてその息子「ルート」(博士がつけてくれたあだ名)との心のふれあいを描いた物語である。数字にしか興味を持たない、しかも深刻な記憶障害を抱えている「博士」と一般の人との付き合いがどのぐらい難しいかは「私」が10番目の家政婦であるところから伺える。しかし、彼女の10歳の息子が博士の家に出入りするようになってから三人の幸せな関係が始まる。博士はルート君を精一杯大事にして、温かい配慮を惜しまない。そして、この人間味あふれる博士が傷つかないように「私」と「ルート」の一所懸命の気配りがまた心を温める。

この小説には、数字に関する話が多く出ているが、その扱ひ方が読む人に嫌味を感じさせず、逆に温かい人間味を感じさせる不思議な魅力がある。この小説は、映画にもなっている。小説とはストーリーが変わっているところがあるが、映画は映画なりに温かみのあるものに仕上がっている。映画を先に見たらきっと小説が読みたくなるのでは？



遠野物語 新版 —付・遠野物語拾遺—

柳田国男著 角川学芸出版 2004 (角川ソフィア文庫)

人間科学部教授 川上 周三

「遠野物語」は、柳田民俗学の原点となった著作である。怪異な話が多く出てくる不思議な著作である。この本は、遠野出身の佐々木喜善から遠野地域に伝わる話を聞いてまとめた著作である。その意味で、柳田による遠野地域の聞き書き記録集である。しかし、山の神・雪女・座敷童・河童・狐等の異人や怪異なものが出てきたり、故人と会った話や臨死体験の話が書かれており、普通の意味での聞き書き記録集とは言えない著作である。遠野地域の生活が反映された著作でもある。山・川・海という自然と生活が関係づけられて、この話は記述されている。狐や河童が出てくるのはその証拠である。海との関係では、津波で亡くなった人の話が出てくるが、この地域はそうした自然災害が多いからである。その意味で、この著作は、生活誌の記録でもある。さらに、臨死体験の話は、結核の持病があり、死と向かい合う体験をした柳田の実存生活を反映している。遠野物語は、柳田の思想と生活誌の記録が一体となった著作なのである。